

私の見た  
女性文化の歩み——与謝野品子から宮本百合子まで——

小倉金之助

—  
いま私の机の上には、芦田高子さんの歌集『内灘』うちなだ（一九五四）が載っています。これは大田洋子さんの作品集『半人間』などととともに、日本の平和と独立のために貢献する、注目すべき文学作品であると思われる。

潟と海にはさまれし砂丘うつくし合歓ねむの花咲き夢煙る村  
この浜に死守すると砂に座す道に乱れ揺れつつ小判草咲く  
祖国に米兵がゐるよまさにここにわがもの顔に砲とどろかし  
試射場に砲とどろけど揚ひばり空に没りしは声揚げてゐむ  
米兵に断られし合歓ねむの根株あり生ひのびてみな瑞瑞みずみずし枝

1  
こういう作を読むにつけましても、私は戦後、社会各方面における婦人の著しちじるしい進出を喜ばないではおられないのです。

じつさい、女性の歴史というのは、ただ、人間としてばかりではなく、さらに女性としての、苦しみと解放のたたかひの歴史なのでした。私はものごとろがついてから、五十五年ばかりになりますが、その間、私の人間形成の上に、女性に負うところは非常に大きなもので、決して男性に学んで得たものに劣るものとは考えられないのです。しかし唯今ここでは、話の範囲をごく狭く、学問や思想や文学や、主として文化方面の問題に限定いたしまして、婦人文化に対する私の印象や交渉などについて、すこしばかりお話ししてみたいと思うのです。

ただ私の職業と生活環境との関係上、婦人の方々との文化的交渉は、きわめて浅く、しかもきわめて狭い範囲に限られているのです。それですから、意味のとりようでは、ほとんど何の価値もない話なのですが、しかし、考えようによりましては、これだけでも、近代女性文化史の小さな一断片と見られないこともあるまいと思うのです。ただ掘り下げ方が足りないために、薄っぺらな片々たる挿話に終わる点につきましては、予あらかじめお許しを願いたいです。

## 二

樋口一葉さんが亡くなられましたのは一八九六年で、私の小学校時代のことでした。それに、その後になりまして、私は一葉さんについてはあまり注意を払ったことがなく、過ぎてまいりました。私を思想的に動かしてくれた、最初の女性の作品は、何と申しましても、当時二十二歳の若い与謝野晶子さんの『みだれ髪』(一九〇一)でした。この歌集は私が十六歳になったばかりのとき、まだ郷里におりまして、中学の友人に見せられたのでした。

そのころ文学について、ほとんど何の興味も寄せていなかった私には『みだれ髪』を読みましても、短歌としての価値などはもちろんのこと、大多数の歌は、歌そのものの意味さえわかるはずもなかったのです。

臙脂色は誰れにかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君

などという、恋愛の激しい情熱と、肉体の愛の大胆な肯定に、驚かされたのでした。

けれども、それにもかかわらず、生まれてはじめて聞かされた、女性の立場からの大胆な人間性の肯定——少なくとも、恋愛の解放の叫びは、形式的な因習的な、いわゆる「道徳」などとはちがひがいて、年少の私の胸に強く焼きつけられたのでした。そうして、いつまでもいつまでも、心の底にひそめられて、私の人間形成の上に相当大きな影響を見せていると思うのです。

実際『みだれ髪』の思想が、どんなに先駆的なものであったか。それをはつきりとさせますためには、高等師範学校の中から、女子部が独立して、女子高等師範学校がはじめてできたのが、ようやく一八九〇年のことでしたし、また目白の日本女子大学が創立されましたのは、皮肉にも『みだれ髪』の出た、ちょうどその年であった、と申しますならば、ほぼ想像がつくかとも思われるのです。

やがて日露戦争を経まして、自然主義文学の勃興時代がまいりました。私は自然主義文学から、思想的にきわめて大きな影響を受けた人間です。けれどもその一方では、そのころから始められた、与謝野晶子さん

の新しい理性的な理智にかがやくような——評論に共鳴している私なのでした。何といたしても、因習的な古い習慣と制度への妥協を許さない、晶子さんの毅然たる態度に敬服したのです。

当時、「良妻賢母主義」教育のみが行なわれていた日本で、良妻賢母主義よりも、まず「人として、娘として」の教育を施せと、はつきりした言葉で初めて唱えられたのは、じつに晶子さんなのでした。（『一隅より』五六〇頁参照）私はこういった考え方から、きわめて多くのものを学んだのであります。評論随筆集『一隅より』（一九二一）から『人および女として』（一九一六）、『我等何を求むるか』（一九一七）などに至る評論家としての晶子さんの業績は、高く評価されなければならぬものだ、私は考えております。

平塚雷鳥さんを筆頭として、当時のいわゆる「新しい女」たちによつて、「青鞥」という雑誌が発刊されたのは、一九一一年九月のことでした。私はその年の春から、仙台に新しく開設されました、東北大学理学部の助手になっていたのですが、それはちょうど郷里から離れて家庭を持った時期で、日本の家族制度に対して、激しい批判の心を抱いていたころでした。そういう私は、「青鞥」に集まった、大体私と同じ年輩の婦人たちが、女性の自我の確立を主張する強い態度に、同情と好感を持ったのであります。

ただ、半ば文学的に、半ば社会評論的な方法による彼女らの主張や——また平塚雷鳥さんの『円窓より』（一九一三）や、伊藤野枝さん訳の『婦人解放の悲劇』（一九一四）——の中には、日本の現実に即しない、何かについてないような、単なる刺激を思わせるような主張や、また十分批判されなければならない思想が含まれていたのも、事実であります。けれども、とにかくそのころから、日本では婦人問題がようやく盛んになってまいりましたし、私もまたハウエロック・エリスの『男性と女性』や『性心理の研究』などを読み耽つたものでした。

ところで、「青鞜<sup>せいとう</sup>」といった雑誌の中に、野上弥生子さん訳で『ソニヤ・コヴァレフスカヤ』伝が連載されようとは、思いもよらなかったのです。ロシア生まれのこの有名な数学者コヴァレフスカヤが、あのように興味深い女性であるとは、私の夢にも思っていなかったことでした。彼女の性格は、私たちがこれまで考えていたような、いわゆる女教師とか、女学者とかいったものとは、まるでちがうからです。この伝記に牽<sup>ひ</sup>きつけられました私は、その訳文のことについて、当時の「青鞜<sup>せいとう</sup>」編集者の伊藤野枝さんに手紙をおくり、野枝さんから長い返事をもらったことがあります。いま物置から「青鞜<sup>せいとう</sup>」を持ちだしてきて、一九一五年一月号を開いてみますと、コヴァレフスカヤが、スウェーデンの大学の先生となってストックホルムに赴<sup>おもむ</sup>いたとき、その土地の生活に馴<sup>な</sup>れてきますと、

「彼女は絶えず自分の心に刺戟を望んだのでありました。……自分でもよく云つてゐた通り、彼女はジブシーの気質で、教養のある市民の徳操は不適當な気がしてゐました。……このことがまた彼女の知識の特性となつてゐました。非常に受容する力があると同時に、何処までも多産で自然でありました。」

——こういう個所に赤インキで引いた線が、いまに残っているのも、なつかしいではありませんか。実はちょうどそのころの私自身が「教養のある市民の徳操は不適當な気がしていた」ときなので、しかもその時期こそは、私の数学研究も、はじめにどうやらすこしは物になりそうな端緒<sup>たんちよ</sup>をつかんだ、ちょうどそういう時期でもあったのです。

### 三

東北大学の総長沢柳政太郎先生が、進歩的精神の教育家として、時代に先駆<sup>さきが</sup>けて大胆にも、女子の入学も

許すことにしましたのは、一九一三年のことでした。そのころの「帝国大学令」には、特に男子を入学させるといった条文や規定がなかったので、沢柳先生はその盲点を衝いたのでしたが、それはただ文部省や大学教授などばかりでなく、大学の学生そのものをも、非常に驚かしたのであります。東北大学の学生代表たちが反対意見を総長に述べましたとき、沢柳総長は、

「君らは私よりも年若いくせに、女子に学問研究を許さないなんて、そんな馬鹿氣たことを考えているのか。」

と、笑って相手にならなかつたと、私は当時の学生代表の一人から聞いております。

かようにして婦人理学士が、日本にはじめて現われましたのは一九一六年で、ちょうど第一次世界大戦の最中さなかのことでした。それはまだ地についていないような、同人雑誌風の「青鞥せいとう」が廃刊された年である一方、もっと幅の広い、若い婦人一般向きの「婦人公論」が創刊の年であったというのも、意味深いように思われます。それはまた当時十七歳の中条（宮本）百合子さんが『貧しき人々の群』によって、われわれを驚かした年でもあったのですが、そのときには、私はすでに田村俊子さんの『木乃伊ミイラの口紅』（一九一三）や『炮烙ひあぶりの刑』（一九一四）のような作品に接していたのでした。

いま試みに、初期の婦人理学士の数を調べてみますと——一九一六年には数学一人、化学一人。一九一八年には化学一人。一九二六年には数学二人。一九二七年には数学二人、化学一人。一九二八年には数学一人、生物学一人——といった、少ない人数ではありましたが、何と申しましても、日本女性文化史にとっては、画期的な事件であったはずで、（物理科の卒業生が出なかつたのは、はじめ物理の教授たちの中に、女性の入学に反対者があつたからだ、聞いております。）

婦人理学士がはじめて現われましたときの与謝野晶子さんの評論は、きわめて興味深いものでした。――

「文学以外の高級な精神的作業に無能であるやうに思はれて居た婦人が、日本ではまだ男子にも其方面に適する人の乏しい理科を修めて、特に二人とも優等の成績をもつて卒業されたことは、まことに空前の事実として、私は黒田ちか子、牧田らく子両女史のために、その異常な榮譽を賀するばかりで無く、われわれ日本婦人のために、高等教育の可能の立証せられたことが非常に嬉しく感じられる。……高等教育を受けた婦人が悉く教育界に集中されることは、在来の大学出身の優秀な男子が悉く官界に集つたのと同じく望ましく無いことである。……高い程度の教育を受けた婦人は……出来るだけ与えられた境遇を改造し、實際社会の中に「人及び女として」の生活を開くことに努力することが必要である。言ひ換れば、学問をした婦人ほど聡明と熱愛に満ちた立派な結婚を遂げること到大勇ママでなければならず、心的及び体的の労働者として、学問的又は経済的に独立するだけの実績を上げねばならず、私人及び公人として、何程かの貢献を人類の文化に加ふところが無くてはならない。学問をした婦人の天地が、教師生活と学者生活以外に無いやうに思ふのは甚しい誤解である。」

（『我等何を求むるか』）  
このような与謝野晶子さんの、じつに立派な勧告にもかかわらず、これら婦人理学士の大部分は、昔どおり依然として、教師になつてしまいました。それも学者や研究者といったふうの人は少なく、ただやや専門的な職業婦人に止まつているのです。それに彼女たちはただ特殊の科学知識を持つているだけで、専門職業以外には、社会的関心を持たないかのように見うけられるのです。わかい女性たちの喜びや悲しみや、生活のあり様に無頓着な彼女ら、文学・芸術についても無関心であるやうな彼女ら、あまりにも狭い職業婦人にすぎない彼女らに、『ソニヤ・コヴァレフスカヤ』伝などは、およそ何の興味もないことと思われるくらいな

のです。私は彼女ら婦人理学士の文化的意義について、長い間深い疑問を抱いておったのですが、近頃になって考えなおしてみますと、それはしかし女性の科学ばかりではなく、当時に取りましては、男性の自然科学者その人たちについても、大体同じことがいえるのであったと、思われるのです。

#### 四

第一次大戦の直後から、およそ満二年間を、パリで送ることになりました。一九二〇年の晩秋には、ソルボンヌ大学の数学教授エミル・ボレル先生の夫人と、お話をする機会をもちました。ボレル夫人は女流文学者として聞こえた人なのですが、そのときには、フランスの演劇について、特に私のような外国人の素人しろうとが、現代フランスのまともな演劇を観るには、どうしたらいいか、ということについて、いろんな注意を与えてくださいました。帰る間際になり、フランスの作家の中で、誰がいちばん好きかと、問われましたとき、「ロマン・ローランです」という私の答に、非常に意外だといったような、妙な顔をされましたのが、いまでも印象深く残っております。

一九二一年の四月に、オペラ座で催したキュリー夫人のための音楽会に出席しました。それはアメリカで、一グラムのラジウムをキュリー夫人に捧げることになったので、近々中に出発する夫人の送別会という名義の集まりでした。そこでは同じソルボンヌ大学の同僚ジャン・ペラン教授や、その他の名士たちの演説がありましてから、キュリー夫人を讃たたえた、故人エドモンド・ロスタンの詩を、老齡の女優サラ・ベルナルが朗読し、キュリー夫人の感謝のことばがありました。

それはある雑誌社の主催とかいうことで、送別会という名のもとに、キュリー夫人主宰のラジウム研究所



への寄付金募集が目的であると聞きましたが、しかし質素そのもののようなマリー・キュリー夫人を、あのまばゆいほどに煌めき輝く、オペラ座の雰囲気の中で、ことに舞台の上に眺めるといふことは、何か相応しくないような感じがしてなりませんでした。私はただ、いかにもパリの社交界らしい、あまりの盛観に驚かされるばかり、音楽もまったくわからない男なので、何が何やら要領をえないで帰ったのでした。

それからしばらく後のある月のことです。毎日行きつけの食堂で、すぐ私の前にいた男女二人の——多分ソルボンヌの文学部あたりの学生でしょう——たちが、女性の学問的才能という問題について、盛んに議論を始めました。女学生はジョルジュ・サンドやシャーロット・ブロンテや、ジョージ・エリオットなどの女流文学者の名を挙げましたけれども、女性科学者の実例を挙げることができないで、たいへん困っている様子なのです。

私はいつも同伴で来るこの学生たちと、日ごろ日常の挨拶を交していた仲でしたので、思わず知らず、

「それなら、たとえばキュリー夫人やソニヤ・コヴァレフスカヤなどは……」

と、女学生に応援したので、彼らの議論はついに女学生が勝ちになりました。このようなエピソードは、とても見聞することができそうにもないことだ、と思いましたが、そのころから私は「科学者としての婦人」という問題について、多少注意を払ってきたのでした。

その翌年（一九二二）の一月中旬、遠い旅から大阪に帰ったばかりの私は、大阪婦人十日会という、社交婦人の集まりの二月の講演に、「科学者としての婦人」という題目を選びました。おもにイギリスの評論家モーザンスという人の『科学における婦人』という、新刊書を種本にして、話をしたのですが、実例としましては、四世紀のアレクサンドリアのヒュパティア（数学）、一八世紀のフランスのエミリー・デュ・シャトレー

(数学・物理)、イタリアのマリア・アネシ(数学)、一九世紀のフランスのソフィ・ジェルマン(数学)、イギリスのマリ・ソマーヴィル(物理・天体力学)、カロリン・ハーシエル(天文)、ロシアのソニヤ・コヴァレフスカヤ(数学)、それから現代のマリー・キュリー(物理・化学)、……などの話をしたのでした。けれども、もちろん、その当時の私には、何も定見などがあるはずもなく、ただ有名な歴史家のトーマス・バツクルの説や、またはハヴェロック・エリスなどの考えなどに従いまして、

「女性の考え方は生まれつき演繹的えんえきてきである。女性は見出したままの真理を受入れる。抽象的なものごとについて、他人の説を受入れてそれに従うのは、女性のほうが男性よりも著しいいぢる。学問上女性が最も多く成功しているのは、数学の方面である」

などと述べた程度にすぎなかつたのです。

その後フランスの科学史家ルビエールの『科学における婦人たち』に接しました。この書物は一八九七年の古い出版ですけど、根拠の確かな、たくさんの資料を集めている点では、モーザンスの本よりも、かえってほかに良心的な著述であると思います。最近ではこういう方面でも、もつと科学的な研究が行届いてきたかと思いますが、私の興味はもうまったく別の方面に向かつております。それにしても日本で、こういった研究をやっている科学史家が、まだ見当たらないのは残念なことです。

外国から帰りましてからは、評論家としての山川菊栄さんや、神近市子さんなどが、私に親しい名となつてまいりました。間もなく関東の大震災で、伊藤野枝さんが大杉栄氏といっしょに、憲兵から殺されたことで、大きなショックを与えられました。

それから後に、大正の末期から昭和の初めにかけて、私は二、三年の間療養生活を送ることになりました。その間に読んだ書物の中には、宮本百合子さんの『伸子』（一九二四―二六）がありましたし、野上弥生子さんの『真知子』は雑誌に連載中でした。『ローザ・ルクセンブルグの手紙』を興味ぶかく読んだのも、そのころのことです。ところが、健康の快復と同時に、私はにわかになんか数学史の研究を始めようになりましたし、またファシズム批判の評論なども書き出しましたので、多忙となって、それから長い間、小説などを読む暇がありません。じつは外国から帰りましてから、ファシズムが台頭たいとうしはじめ初期のころ、およそ十年ばかりの間（一九二二―二三）は、私の一生のなかでも数学とその普及のために、一番多く働きました時期なので、そのころは大都市ばかりでなく、ずいぶん辺鄙へんびの地方の講習会や教育会などに出席したものでした。ところが、そういうた会合に出席参加する熱心な人たちは、いつでも大多数は男子に限られていて、女子の方はきわめて少ないばかりでなく、婦人の方から質問をうけたり、感想を聞いたことは、ほとんどまったくなかった、といつてもいいくらいなのです。なぜ私が婦人文化そのものに、興味を失いかけて来ましたのか——その理由の半分は、これから推察されることと思います。

## 五

軍国的ファシズムの圧力が強くなって、ついに日中事変が起こってからのことです。そのころ私は、もう大阪を引きあげて、東京に移っていたのですが、一九三八年に、岩波新書の一冊として『家計の数学』という小冊子を書きました。家計などにあまり関心を持っていなかった私としまして、この本は家計そのものより

も、むしろ家計といった最も日常的な、生活そのものの間に起こる、いろいろな問題の解決に必要な数学、それを通して数理的な科学的な考え方と取扱い方——いわば科学的精神の開発を狙ったのでした。それですから、私自身としては、家計の改善そのものを、第一義的な目的と考えてはおらなかったのです。(こういう私の精神をもっと高めて、家計以外にも範囲を拡げることには、直接協力されました桜井一衛君は、その成果を見ないうち、戦争末期に病気のために倒れてしまったのでした。)

ところが意外なことに、家計そのものについて、婦人たちのほうから私に協力を求めてこられたのです。たとえば自由学園では、この『家計の数学』のある部分をテキストにして、研究会を開いてくれました。私は羽仁説子さんや「婦人之友」の記者の方たちから、たいへんお世話になったのですが、女学生たちの間から、いろいろな質問や活発な意見が出て、私にとっても大きな収穫でした。

目白の日本女子大学の氏家寿子さんの家計簿の作製に、協力を求められましたのも、たしかその翌年(一九三九)であったと思いますが、こういったことは、私にとつてまったく思いもよらないことでした。もちろん、それというのも日中事変以来、そのころから物価が急に騰貴し出しましたので、国民の「生活の設計」ということが、重大問題となってきたからではありませんけれども、私としましては、現実の物資の条件などについては、ほとんど何一つ知らない人間であったのですから……。

ところが、ちょうどそのころのものと思われ、宮本百合子さんの「婦人の文化的な創造力」と題する、注目すべき論文の中に、こう書かれています。

「女子大学の家政科といふやうなところで、生計指導のための展覧会を行つた。……が、そこに書き出された物価指数、生計指数として示されてゐる数字は、ほとんどその大部分が古いものであり、やや誇

張すれば二年間前くらゐのものであつたさうだ。……教育の程度といふやうなものが、文化の程度や質と一致するといひ切れぬ適切な実例である。……教育は、彼女たちに物価指数といふことを教へ、生計指数といふことを教へ、統計や図表の製作を可能にした。しかし、生きてゐる生活の姿は、一つの先入観となつてゐる目的を達するために歪められて、あるままの条件、そのうちにこそ国民の多数が生きてゐるその条件を、無視してしまつてゐる。」（「宮本百合子全集」第九巻、八五頁）

——こういった意味での、つよい批判をさせているのであります。こういう正しい批判にたいしましては、私なども間接ながら、その責任の一部を負わなければならぬような気がするのであります。

批判といいますが、もう一つ、ちょうどその年のことと覚えていますが、大阪大学理学部の数学科での私の構義に、三名の女学生が出席していました。けれども東京からときどき講義に出かける程度で、指導教授でもない私には、彼女らの学才や性格などについて、ほとんど何も知つてはいなかつたのです。ある日、数学史の講義のとき、三人の中でいちばん若く見える人から、何の説明もなく突然「先生の講義は、どういう意味を持っているのか、ちつともわかりません」という、手きびしい批評をされたことがありました。惜しいことに、その学生さんは間もなく病死されましたので、その批評のはつきりした意味は、いまになつても私にはわからないのですが、当時のいろんな事情から推察してみますと、彼女の批判は「小倉の数学史の講義は、権威ある西洋の書物によつたものでもなければ、また諸大家の説を伝えるものでもなく、もちろん系統的な演繹的な整然とした理論ではないし、何か古い時代の原書やら古臭い文献などをいろいろ持出したり見せたりして、妙に実証的であり、それに数学そのものが歴史や社会や経済のことなど入り混（まじ）るので、ゴタゴタして何が何やら、どういふつもりなのか、ちつともわからない」といった意味ではなかつたのかと、何

かそんなように思われるのですが……。

太平洋戦争の前夜にあたる一九四〇年のころでした。中央公論社の前社長・島中雄作さんは、「国民生活学院」という学校を創立されました。それは「国民の生活指導」に従事する女性の養成を狙った、いまならば一種の女子短期大学とでもいったもので、私も理事の一人として、経営に参与させられたのでした。実際の教務主事に当たられた方は六カ年ばかりの間に、たしか三度変わったかと思いますが、ちょうど一九四二年ごろからの一兩年間は、河崎ナツさんが主事であったので、私も河崎さんと数回お話をする機会を持ったのでした。しかし何しろ戦争の最中のことで物資困難のおりであるし、それに学校の性格が、あくまでも実践的でなければならぬので、河崎さんもこの学校のためには、非常な苦心をなされたように思われます。

あるとき、理事会後の晩餐ばんさんの折に、野上弥生子さんといっしょになりました。野上さんはそのとき私に、「なぜ、あなたはご自分で学校の数学をおやりにならないの」

と尋ねられました。実は私も女子教育には相当興味を持っていましたので、現にこの学院の前身「生活ゼミナール」の时分には、数時間講義をやった経験もあつたのですが、ちょうど学院のできたころは、不健康であつたのと、ほかの学校の仕事に多忙であつたために、どうしても自分で講義を持つことはできなかつたのでした。

それにしましても、この国民生活学院というのは、はじめ城戸幡太郎さんや宗像誠也むなかたさんの企画になつたもので、当時の高等女学校卒業生を入れる二カ年の教育としましては、たしかに特色のある、生き生きとして、めずらしい存在であつたと考えられるのです。ただ戦争中のために、ことにだんだん戦争末期に近づくに従いまして、何か戦争に協力しなければならぬような形になってきて、最後には、校舎も設備も戦火の

ために全焼してしまったのでした。それで敗戦の翌年の初めに、ついに廃止に決定したのでしたが、その最後の理事会の席上で、島中さんが理事以外に、帯刀貞代たてわきさんの意見を求められましたことは、私にとっては忘れられないものでした。

## 六

敗戦の翌年（一九四六）の春、私は新しくできたばかりの放送委員会から、日本放送協会の会長に推薦されましたが、病気のために固くお断りしたのでした。そのとき交渉に來られました岩波茂雄さんの口から放送委員の宮本百合子さんが、熱心に私を推している、ということを知られたのです。

やがて宮本さんの『播州平野』と『風知草』が現われました。そうしてその翌一九四七年の二月に、雑誌「展望」のために、私は不健康なのを押して宮本さんと対談をさせられたことがあるのです。ところが前もって何の打合せもできていなかったため、私は全然思いもよらないような問題を、かずかず出されて閉口してしまい、折角の機会なにかかわらず、対談はうまく、なだらかに進まなかったものでした。雑誌に載らない話の中で、私は宮本さんに、

「これまであなたを、もっとこわいお方かと思っていましたが、『風知草』を読んで安心いたしました。」と、申しましたときには、百合子さんもお笑いになられました。

しかし、宮本さんの全集が、完成になりましたから、いろいろの感想や女性論などを丁寧に読みますと、その中にじつに「女らしい」百合子さんを見出すのです。あの対談の際に私が申しました言葉は、まったく自分の無知を告白したようなものであった、と今日では考えております。

その年（一九四七）の七月に、私はまったく止むを得ない事情で、日本民主主義文化連盟、いわゆる「文連」の責任ある地位につけられました。文連というのは、各種の民主主義文化団体の協議機関なのですが、そのために、それから一兩年の間、——私はその頃まったく病床にあったのですが——「働く婦人」という雑誌の寄贈をうけて、読むことができたのでした。そのときになって、この「働く婦人」の前身こそは、昭和のはじめ一九三二年に婦人協議会の機関誌として、宮本さんたちが創刊し、編集したものであった、ということ、はじめて知った私でした。

その一九四七年の終わりごろから、四年半ばかりの間、来る年も来る年も、大部分を病床に送るようになってしまいました。床の中で私は、宮本さんの『二つの庭』と『道標』や、佐多稲子さんの『東京の地図』や、平林たい子さんの『かういふ女』や、野上弥生子さんの『迷路』、そのほか林芙美子さん、壺井栄さん、小山いと子さん、大田洋子さん、由起しげ子さんたちの作品を、少しばかりずつ読んでみたのですが、日本の平和と独立のために、あれだけ精力的にたたかい続けられた宮本さんは、ついにその間に倒れてしまわれたのでした。

ところが老年の私は、幸いにも一昨一九五二年の初夏に、若葉の匂いをかぐころから、ようやく健康をいくぶん快復するようになりました。そして生まれてはじめて書いてみた婦人の伝記というのが、「ヴォルテールの恋人——デュ・シャトレー夫人の生涯」でした。そして昨年からはじめて歌集というものを手にして、すこしずつ読み出したのでありましたが、たまたま内灘<sup>うちなだ</sup>軍事基地のたたかいを通じて、芦田高子さんの連作に接したのでした。



もうこの辺で、この思い出を終わりたいと思うのですが、私の話をごくざっと、ただ一口に纏めますなら「与謝野晶子から宮本百合子まで」とでも、いっべきところでしょうか。何と申しましても、「宮本百合子さんの後を継ぐ」ということは、わかり皆さんがたに課せられました、一つの大きな現代的課題なのです。

戦後の今日は、以前にくらばまして、女性がどんなに解放されたか、女性の学問への道がどんなに開かれたか。そういうことについては、改めて申すまでもないことです。いまさら女性は、文学芸術には適するけれども、自然科学や社会科学などには不適當である、などという議論は、あまり必要もないことと思います。そんなことよりも、若い女性の皆さん方は、何よりもまず、そのようなインフェリオリティ・コンプレックス（劣等感）を拭い去って、皆さんみずからの志すことに向かって、勇気をもって前進されたいものがあります。

（「婦人公論」一九五四年九月所載）

- 『読書雑記』（小倉金之助著作集）第八巻、勁草書房、一九七四年二月）所収。
- 読みやすさのために、底本の振り仮名の他に適宜振り仮名をつけた。
- 【 】は編者の注である。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub>でタイプセッティングを行い、dvi2pdfxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。